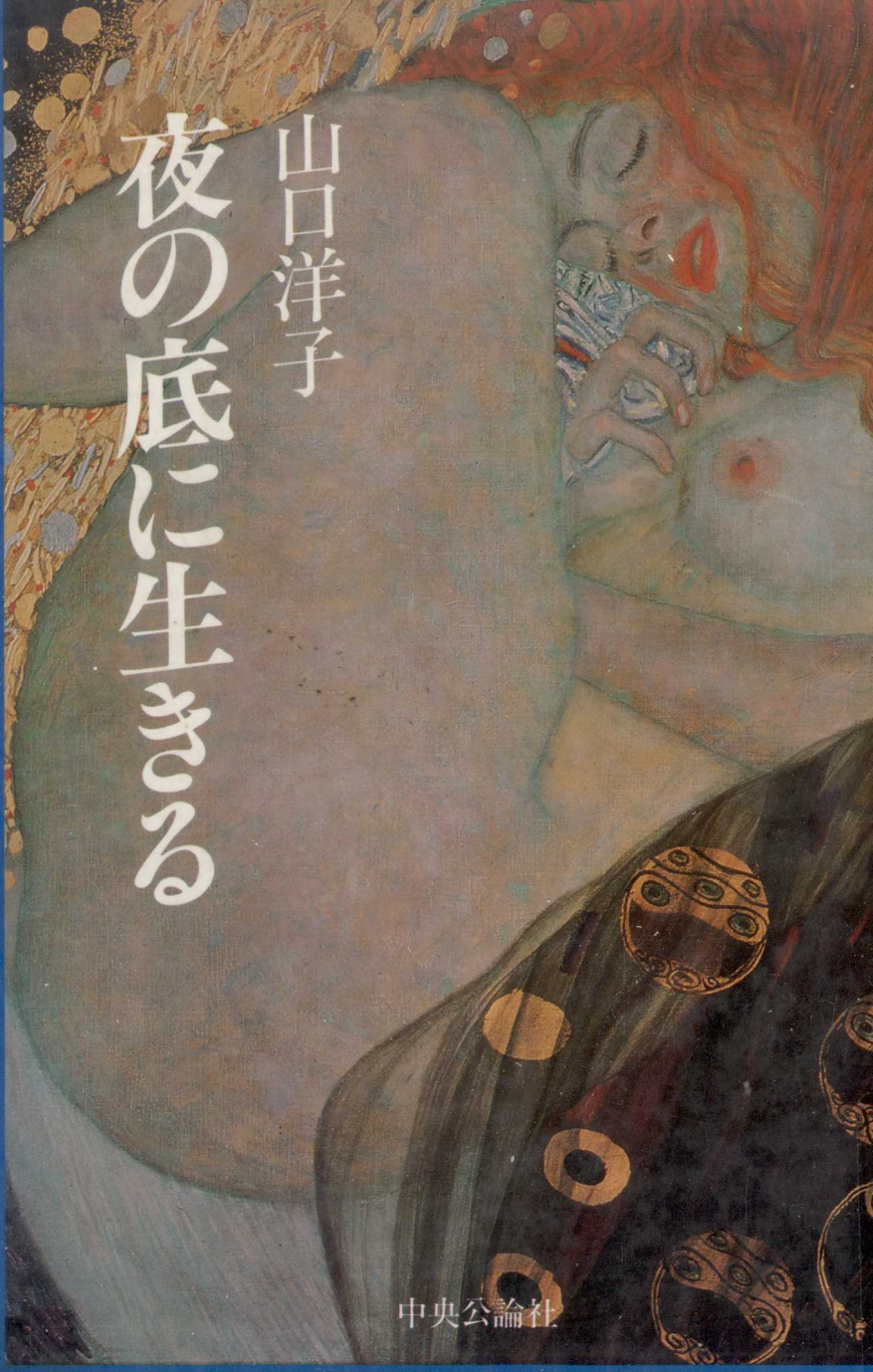

夜の底に生きる

山口洋子

中央公論社

山口洋子

夜の底に生きる

中央公論社

夜の底に生きる

昭和四十八年九月十五日発行
昭和五十年一月二十五日十刷

定価八五〇円

著者　有吉佐和子（ありよしさわこ）

発行者　佐藤亮一

発行所　新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71　振替東京四―八〇八
電話　業務部03(266)五一一一　編集部(266)五四一一

印刷　株式会社金羊社
製本　新宿加藤製本

目次

死んでいった夜の蝶（ホステス編）　3
夜の靴音（ホスト編）　71
「ラ・ママ」の美しい男たち（ゲイボーイ編）　145

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

死んでいった夜の蝶（ホステス編）

バラバラにされたママ

昭和四十二年十一月、いまからちょうど十七年まえの晩秋、暮とクリスマスの前景気でざわめく銀座のネオン街に、誰もかれもが当分その話題で終始するような凄まじい事件が起きた。

前年の同じ秋、華やかに新装オープンしてようやく一周年をむかえたばかりの「ブラックタイ」のマダムが、頭や手足、胴体をバラバラに切り離されて殺されたのである。

「え、あのひとが」「まさか、ほんとかい」

さすが他人の不運な噂にかまびすしい銀座雀も、その話の声のトーンだけはひときわ低くなった。

通夜が行なわれたのは事件が明るみに出た翌日の十一月七日、八日は首がみつかり、十日の朝、水上署のランチは隅田川で爪にピンクのマニキュアをした女の右足を拾いあげた。これで八つに解体されたマダムの遺体は全部揃ったわけである。

死体遺棄を手伝った少年の通報で事件直後すぐに逮捕された犯人は伊藤和義こと本名韓和義二十三歳。金融業をやっているというふれこみで銀座に出入りしていた男だが、マダムとは情人関係にあり、金銭関係のこじれで逆上して殺したものと報道された。

今日首が出たそうだ、胴体がみつかったという話題が出るたびに、彼女を知る客やホステスは、まるで自分の身うちがバラバラにされたようにひやりと首をすくめて手足のつけ根をなぜまわした。それほど彼女は良い意味でも悪い意味でも陰影の多い華やかな存在感のある女だったし、猟奇的な殺されかたがまるで眼の前に血しぶきをあげて展開された地獄絵図のごとく、誰の瞼の裏にも生ま生ましく感じられたのである。

「ブラックタイ」マダム山崎美智子、昭和十四年六月三十日樺太生れ二十八歳、自称二十六歳。

もちろん私も同じ銀座の住人であり、マダム同士としても顔見知りの仲であった。痩せがたの丸顔で、顔もからだも肉がうすく、そのうすさがかえって男ごころをそそるような和風美人であった。

彼女の経歴はありきたりの銀座のマダムと異なり、赤坂のナイトクラブのホステス出身である。辺境の地で生れ、雪深い北の街江別市で育った彼女が、東京の赤坂のナイトクラブの豪華なシャンデリヤの下にたどりつくまでにどんな苦闘の経過をたどったかわからないが、とにかく私が彼女を知ったときは、「西さん」と呼ばれて「ゴールデン赤坂」「月世界」「ラテンクオーター」と店をかわりながらナンバーワンの座に駆け登っている最中であった。

ネオン街が、現在とはくらべものにならないぐらい活気をおび、赤坂は赤坂独特のムードで外人客や大手の商社マンなどを中心に派手な賑わいをみせていた時分であったが、彼女はほんとうの意味の高級の最終ターゲットを、銀座にしぼりこんだにちがいない。

突然銀座マダムとして登場した彼女を、銀座の女たちは、必ずしも好意的に迎えいれなかった。
「銀座と赤坂の商売はまるっきり違うのにね、わかっているのかしら」
「そうよ、クラブの女みたいに、いきなりからだを張ってビジネスになるところじゃないんだから」
「そんな恐い商売する女？」
「当りまえよ、なんてたって赤坂の女なんだから、裾をまくってバトンタッチっていう凄腕よ」
「でもそんなやりかたじゃ銀座は続きっこないわ」
「だからさ、おそらく一年そこそこでたぶんお手あげってことになるんじゃないの」
あとから考えてみると、銀座の女の陰口はすべて的中していたことになるが、彼女は彼女なりに意地と張りをみせて銀座でがんばった。
「貯金が二千万のほか、赤坂に千二百万円相当の季節料理の店『カオル』を持ち（当時はナンバーワンホステスやマダムが、主力で働いている店の他にもう一軒小さなプライベートな店舗を持つことが流行していた）、宝石類は六十万所有、衣装は一着六、七万のものが百二十着余り。そのうえ昨年十一月には、銀座に総工費九千万円、ホステスのスカウト費二千万の巨費をかけて『ブラックタイ』を自力でオープンしたトップマダム」としてマスコミに喧伝され、彼女は艶然たる笑みを浮かべて深夜のTV番組などにも出演した。くり返すようだが話はいまから十七年まえ、一流クラスのホステスの給料がまだ一日一万そこそこという時代である。現在はトップクラ

スなら四、五万が相場なので銀座特有の貨幣価値換算で計算すると三倍から五倍の金額になる。

ところがこの売り文句にもはや山崎美智子の哀しい虚勢があった。

「ブラックタイ」は彼女の店ではなく、彼女は日給一万五千円、他に売り上げの五分の歩合がつくただの雇われマダムにすぎなかったのだ。ましてや億の声をきく開店資金を自力で調達できようはずがなく、それどころかそのころ同棲していた妻子持ちの愛人（三十歳前後）にかなり金をつぎこみ、同時に「カオル」も「エル・ソタナ」と名前を変えたりしてあまり経営もうまくなくて借金だらけらしいという説もあった。

「ブラックタイ」の資本家は一人ではなく、銀座でバーを経営するかたわら同業者相手に金貸しをやっている人物や、不動産業者などがそれに加わっていた。そのなかの一人Z氏のコメントによると、

「なにぶん赤坂で一ヵ月に楽に七十組の指名をとっているというからね。月給は四十五万、ほかに歩合を加え月収七十万円くらいの条件できてもらった。もちろん支度金、契約金を含めて数百万を現金で渡したよ」

ということである。鳴りもの入りの〝自力で独立〟の化けの皮はあんがいあっさりと剝がれてしまうのであるが、私もオープンの当日、その資本家の一人でもある「姫」の常連客の義理で開店披露パーティに顔を出した。

「ブラックタイ」という名にふさわしく、白黒のインテリアの洒落たつくりの四、五十坪の店内

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

は、祝の花束と彼女の客で、フロアの部厚い絨毯もみえないほどぎっしりとたて混んでいた。やや暗いめの照明と、やたら黒服の目立つオープニングパーティは、オープニングというより華やかなスターの告別式を連想させる。そういえば今日は仏滅だった、と私はつまらないことを思い出した。なんでまたわざわざ仏滅の悪い日を選んでオープンなどするのか。私も特に占いや方角に凝る方ではないが、引っ越しの日や新装開店日の暦くらいは多少気にかける。それもやっぱり割り切った赤坂商法の合理性のせいなのであろうか。

「あら、ママお忙しいのにようこそ」

私の姿を見つけて彼女は愛想よく寄ってきた。

「すてきなお花をほんとうにどうも……、銀座は一年生ですので何かとよろしく」

「とんでもない、こちらこそ」

定石どおりの会話を交わしながらひらりと返した彼女の白い手の甲に、得意満面な今夜の気持そのままの大きなダイヤが燦然と光って輝いていた。同じ席に三分といられずあちこち頭を下げて挨拶をしている彼女の背を、店の片隅で二、三人の資本家達がじっと見守っている。裏話を知っている私はふと彼女がとても可哀そうなあやつり人形のように思えた。あふれかえる花束のまんなかで、紙の人形みたいに彼女の両肩と胸と、彼女の幸せがぺらぺらと薄っぺらく透けてみえたのである。

事件が起ってしまったからいうのではないが、いく度思い出してみてもあの「ブラックタイ」の開店日（オープン）だけは、客も、マダムも、黒服たちもどこかしっくり落ちつかない奇妙なまぼろしの祭礼だった気がしてならない——。

蜂の巣をつついた騒ぎになったマスコミや週刊誌の彼女の周りの人間の歯に衣きせぬコメントは、彼女がなぜこんな無惨な殺されかたをしなければならなかったかという真実をどこかで浮き彫りにしてみせる。

「美人なんていえないんじゃない。背だってわたしくらいよ、百六十センチあるなんてウソ。すごい厚化粧していたのよあのひと。だって左目のまわりにアザがあるんだもの。家に帰って寝るときも化粧をとらないんだから」

「マダムだというのに女のコの客をとって自分が店のナンバーワンになろうとするのね。チップだってひとりでみんなふところへ入れちゃうのよ。お札を数えるときなんかパッパッとすごく早いの。きびしい眼をしちゃってさ、そばで見ててもこわいくらい」

「教養がないの。『巴里に死す』（芹沢光治良）を五味川純平の作品だと言い張ったり、『運命論者』（国木田独歩）を藤村だといったりさ、知らなきゃ黙ってりゃいいのに。ママのお客は超トップクラスといった人はほとんどいなくて、二流企業の社長か一流でも部長どまり。えたいの知れないやくざまがいも結構多かったわね。ま、金づかいで三流というのはいなかったけど御本人は四流だったんじゃない」

「自分のからだを張りきれないときは平気で店の女の子を自分の客に仲介するのよ。そんな約束を知らずに客に食事を誘われてついていってあとで泣いて怒る子もいたけど、マネージャーなんかにあんなホステス退めさせなければ私がやめるといって自分も泣きわめく始末なのよ」

「マダムになってからも男出入りがめちゃめちゃ――」

何とこれが同じ「ブラックタイ」に勤めていたホステス達のマダムに対する追悼の辞である。誰一人からも「いい人だった」「可哀そうねえ」という言葉がきかれないのには、唖然とする他ない。親しい客や黒服、マネージャー連中でさえこういうのだ。

「大物じゃないよ、経営感覚もゼロ、やりかたが汚かったもの。女たちに客とやらせといて、その客をあとから自分がとっていたんだから」

「客に対するテクニックは洗練されていたが、仲間とかホステスの付きあいには排他的で自己防御一本やり」

「成りあがりだな、あの感覚は」

「彼女は〝女〟を薄利多売していたんだねえ。ホステスプロフェッショナルとしての〝分〟を知らない、あれじゃ墓穴掘っちゃうのも自業自得さ」

よくからだが持つと思うほど、これと眼をつけた男は逃さなかった、夜になるとガラリと人間がかわる、嫉妬ぶかくヒステリックで心を許した人間などなかったんじゃないか、ホステスとしての小才はきいてもマダムとしての統率力はない等々、よくもこれほど出てくると思うほど、死

者に鞭打つ言葉の羅列である。何とか一言でもいいことをいってくれる人はいなかったかと眼をサラにして探してみるが、
「商売熱心で一日も休んだことがない。遅刻もしない」
「職業に徹しきって並はずれた執念がある」
「客がこうしてほしいと思うことを必ず一足先に見ぬいてサービスしていた」
という程度で、人柄や人間性についての褒め言葉は皆無である。わずかに北海道きっての名門校といわれるミッションスクール藤学園に通学していたころの後輩が、
「いっしょに汽車通学をしましたけど、とても世話好きでめんどうみのいいお姉さま、という感じの人でした。よく私たちがワイワイさわぐなかで、あのひとだけが一人黙々と本を読んでいたのを覚えています」
といっている。努力家だが少しも派手なところがなかったという彼女の女学生時代。しかしクラスメートの一人は、彼女が卒業したら東京へいって左のこめかみのところにあるアザを消すために整形手術をするのだという強い意志に驚いている。田舎の娘たちには実感として、整形などという言葉を思いうかべることすらないころのことである。
彼女のアザのことは私も、彼女の訃報と共にはじめて知ったのだが、そういえばふだんから濃いめの化粧をしている女性だった。何回も念を入れて塗ったと思える厚ぼったいマスカラの眼の奥はほんの気持斜視で、それが彼女の魅力にもなっていた。彼女はその斜視のせいで客席で、一

途に欲望を見すえている強い眼の表情から救われていたのではないか。アザの存在を知っていた数少ない客の一人Y氏の話、

「そのアザがあったおかげで彼女は化粧を工夫し、コンプレックスを克服するために接客術の奥の手をあれこれ考えるようになったのでしょう。彼女はそのアザで成功できたともいえるんじゃないですか」

という意見は興味ぶかい。眼も鼻も整形を重ねた顔に、昔の面影はほとんどなかったという。アザを隠したい一心だけだった少女は、女として一歩一歩階段をのぼりつめるにつれて、一体何を隠しはじめたのだろう。

とにかく「ブラックタイ」での彼女の評判は落ちる一方で、それにつれて成績も客種もどんどん下降線をたどりはじめた。売り上げの最初の約束も一ヵ月二百万だったのに八十万くらいしかあげられず、給料も一万五千円から一万円にダウンされて雪だるま式に増え続けるぼう大な客の未収金と共に、彼女の懐の内情は火の車だったという。看板マダムがこの有様では「ブラックタイ」の店じたいの業績も芳しいはずはない。ついに七月、最初の資本家は持ちこたえられず交替し、かわって数人の債権者が入りこんできて多勢の集団経営になった。

そのころの美智子マダムの売掛金千五百万円。店側として彼女を退めさせるに退めさせられず、本人としても退くに退けない金縛りの状態にあった。そんなときに彼女の男として数人の客たちと登場してきたのが事件の犯人、韓和義である。

まえにものべたとおり、彼女には赤坂のクラブ時代からヒモと呼んでもいいほど貢ぎぬいた、Nという愛人がいた。彼は彼女と同棲するために家庭を捨て、経済的にはほとんど彼女の世話になって生活していたらしい。自動車関係の仕事をしていると本人は自称していたが、彼女が季節料理「カオル」を、スナック「エル・ソタナ」に変更して模様替えしたのも、店のマネージャーとしてNを据えて格好をつけてやるためだったのである。

男の派手な遊びの費用も、カマロ（外車）の購入費も、彼女は惜しげもなく汗と笑顔で稼いだ自分の金で支払った。Nが妻と離婚して、ひょっとして先天的に心臓に持病のある子供を引きとらなくてはならないという話になったときに、彼女はすぐデパートへ駆けこんで幼児用品売り場から赤ん坊にすぐさま必要な一式を買い求めてきたという。

商売では、がめついの、常識知らずのと人非人みたいにいわれる彼女の裏面の素顔の本音は、案外下らない男にもろい、いじらしさにあった。

Nと同棲中、「ブラックタイ」のオープン直後の飛ぶ鳥を落とすいきおいの時分、彼女は某週刊誌のインタビューに答えてこんな言葉をのべている。

「私って表面気が強いっていうか利口そうにみえるらしいんですが、意外と弱いところを持っているんです。ふだんはモリモリ仕事をやってても何かの拍子に、結婚の幸せっていうか、ふっと平凡な奥さんでもいいから結婚したいな、と思うことがありますね。大恋愛は二度くらいあるん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.